

難

思

光

（喚起位）

人生の目的

人間と生れて何の爲めに生きてゐるか云ふことに就きては、進んだ人は其目的を高尙にする、人格の低い者は其目的が低いのでございます。近い例を申しますと、市中は澤山な人が通行して居るのを見ても、其人々に對して何所へ行きますかと尋ねますと或は斯う云ふ家に行くとか又は散歩に行くとか何か目的があるに違ひない。一生目的なしに歩いてゐる人は實につまらぬものであります。人生那邊に向つて進み行くのであるかと云ふことを知らぬ人は丁度馬車馬と同じ事で盲目的生活であります。馬は馭者の爲めに鞭うたれるから何所へ行くと云ふことは知らずに進み止まれと云へば止ります。即ち馬は盲目的であります。人間もなんだか知らぬが學校へ親が入れて呉れて、それから結婚をする、結婚すれば子供が出来る、出来れば育てなければならぬ。それは世間がするから自分もしなければならぬと云ふのは盲目的生活であります。段々世が進みますと人間は萬物の靈長であるから確かな目的を定めて進まなければならぬ。而も進むに従つて自分の目的が高等にならなければならぬ。さ

うして人生の歸着する所に進んで行くのであります。人生の歸趣と云ふものは研究して見ますと趣味のあるものと存じます。人間智力が進みますれば高等の目的を以て進みますから、猶更趣味が深くなると思ひます。そこで人生を宗教的に見て行きまして人生を唯形骸のみに見れば實に價值が低い假令生活の程度に高低は有するものゝ歸着する所は墳墓の塵と化して仕舞ふのである。

さて人間は何を目安にするかと云へば、動機と目的即ち自己の伏能を開發して正當に生活するのであります。伏能とは人間の精神の奥に伏在せる佛教で云ふ佛性であります。人間は誰も靈妙なる佛性を有つてゐるけれども、たゞ棄て置いたのでは開發が出來ませぬ。例へば人は立派な頭腦を持つてゐても知能を開發する教育を受けませぬと働きが出來ぬと同一で、立派な靈性をもつてゐても開發が出來ず、可惜寶石を空しく土中に埋めて置くのであります。

吾々が斯うして生きて居ますのは大きな宇宙の大法其規則に従つて活かされて居りますのであります。でありますから宇宙の大法に従つて行かなければなりません。吾々は宇宙の大法によつて活かされ、さうして吾々を活かして居りますのはそれ／＼目的があるのであります。宇宙の規則の中に目的があつて吾々を活かして居るのか又は唯だ目的なしに因果律的に萬物を活かして居るかと云へば、宗

教から云へば、宇宙には大法があつてそれに隨順すれば成佛することが出来る、それを法性に隨順すと申します。それに従つて行けば佛に成りますので、宇宙の目的がある、それに従ひますと吾々の精神は佛になることが出来るのであります。宇宙に眞理があつてそれに従ふから佛になりますので、譬を以て申しますれば宇宙は大きな親であります。吾々は子供であります。例へば人間の親と子であります。子供が七歳になれば學校に就く。そして學校に行きますのは辨當を食するのが目的ではない。知能を啓發し徳器を成就する所に目的がある。本來子供の頭腦には知能をもつて居るけれども啓發しなければ知識の働きが出来ぬ。道德を養はなければ徳器は成就せぬ。その如く宇宙の大なる親が吾々人間界てふ學校に入學させた。そして大なる親が天地萬物の備を以て八十年間吾々に斯うして衣食を與へてくれるのは親が子供に衣食を給して學校に通はせると同一である。

人生の標準は

(一) 宇宙の大法に則り終局目的を定め生を盡して進趣すること。

(二) 自己の伏能なる靈性を開發して正當に生活すべきこと。

大御親

宇宙には一切萬物の中に萬物の大本となる大御親（おほみこと）在ります。此大御親を信じて之に歸命信順するのが宗教である。故に我佛教では釋尊は形は人間に身を受け給ひしかども其御本體は宇宙の中心本尊にして本有常住なる法身佛に在ります。其法身より身を分けて此の娑婆世界に御出ましなされたのである。故に釋迦尊は形の上より拜すれば人間の佛なれども、其の御精神の内に入つて見れば宇宙全體が釋尊の心なので、其中心に、盧舍那（ろしゃな）如來と云ふ無量の相好光明を以て普く十方世界を照し給ふ御靈體に在ります。其靈體のルシヤナ如來と肉體形の上に現れし釋尊とは外より見れば別のやうなれども其の内面に入つて見れば一體に在ります。故に釋尊は其の内觀の一體なるよりして三界は我有で其中の衆生は悉く皆我子であるとのたまひぬ。

一切衆生は其の毘盧舍那（びろしゃな）と云ふ法身佛の分れたる子である佛性をもつて居る。けれどもまだ赤子のやうなものにて佛の性はそなわつて居るけれども、いまだ御育てにあずからざれば佛の子とし

ての働きは出来ぬ。

とまれ、如來は我等が眞の大御親(やみお)に在ませども、久遠劫來大御親と離れて、只此肉體のみを愛して心靈が御育てにあずかる事を知らずして乃至今日に至りて淺ましき凡夫の身と成つて居る。實に慚恥すべきである。幸に釋尊が大御親の現はれとして此世に出で給ひもつばら大御親に歸命せよと絶叫し給ひし御教に遇ふことを得しは實に眞に幸福である。然るに世には一の大御親の在ますことを知らず唯だ我見我慢のみを増長して、現今に此の肉體の生活をして居るのも全く大御親が天地萬物の設備を以て我等を活して下さることを何とも思はで、自分勝手の見ばかりを張つて居る者の多いのは、大御親に對して申譯なき次第である。世の中に親なき子程憐むべきものはない、況んや靈の大御親を識らずして人生を闇黒裡に葬つてしまふもの程憐むべきものはない。

幸に我等は大御親の招喚の御聲に驚きて御親に歸し、日々に慈悲の乳房を含め哺育せられて益々大御親の在ますことを眞に信認し得らるゝやうになりしことは偏に御親の御慈悲の然らしむる所と想へば何ともかたじけなし。されば一切の同胞衆が大御親の在ますを識らずして生涯を闇の中に葬つてしまふのを見れば何とも憐れ同情に耐へぬ。何かして大御親の御手にすがる様に勧めずに居られぬ。さ

れば世の同胞衆よ、すべて靈あるものは悉く我子であると仰せられし如來の聖意を畏み體せられよ。

あなたの前に在ます大御親

大御親は天地間何れの處にも在さざる所なき大御親なれば、今現に此處に在まして、大慈悲の面をあなたに向け給ふて在ます。あなたは信じて居ますかまた信じませぬか。釋尊は如來是法界身、一切衆生の心想の中に入り給ふと仰せられた。宇宙全體に周遍する所の靈體に在まれば處とて在まさざる所なく一切衆生の心想の中に入り給ふなれば、君はいかに注目して如來を見奉らんとおもふも、如來を見奉る事は、太陽または月ををがむやうに初から外界に心を注いでもをがめませぬ。もと如來は絶對の靈體にして大智慧の心として一切處に遍滿し給ふ。

只あなたが一心に念佛する時あなたの心靈に入り、而して之を投映する時に客體化して現じ給ふ。如來の眞法身と念佛者の心とは最も近い。どんな物よりも近い。いかにとなれば一室に在つて障子を隔つれば、も早や室外は雲外萬里の隔てがある。またそれよりは自分の掌（たの）でも若し閉目して

臉一枚隔つる時は掌中の物も見えぬ。然るに我等念佛者の心眼の前には虚空遍滿の法身が扉を閉ぢたる中に於ても明瞭に見えて、それよりは近く、たとえ閉目しても了然と見ゆる。されは臉の中よりも近い。之は直觀的に吾人の心靈と如來とは實には一體不可離の關係を以て炳現して居る。實に近縁である。唯だ内心に念佛なくして唯形のみに求むる如きは十萬億土のみにあらず實に無限の隔てがある。

宗教の中心本尊

大御親は三身に分れて在ますと雖も元は一體である。法身としては天地萬物の本體にして一切衆生を生み且つ活して下さる御働にて、報身佛は私共の法身から受けたる靈性を開發し又煩惱を靈化する爲に智慧と慈悲との光明を以て念ずる衆生を攝化し給ひ、應身として人間世界に御出ましになつて人類に御親の聖意を教へ給ふのである。故に歸する所は一體の三面に過ぎぬのである。

大御親より稟けたる佛性は自分の力で之を開きて圓滿なる徳を顯すことは出来ぬ。又自己の煩惱の

惡質を自分で解脱(すだ)して完全なる道德と靈化することも出来ぬ。佛性を開發し煩惱を靈化して圓滿なる人格とならんには報身無量光如來の光明を仰がねばならぬ。故に報身佛が最も尊いので宗教の中心本尊は報身佛である。

御親の御答

大なる御親は十方法界を遍く照し、わけて我名を呼びて頼む者に答ふる心光を以て衆生の心靈に靈妙の響を與へ給ふ。さればあなたが一心に餘念なく稱名する時、あなたの一心彌陀に對して眞正面に心を向けて念ずる時は、あなたの眞正面に在ます御親はまた眞正面にあなたに答ふるに靈なる響を以てす。あなたに御答が如何に聞え上げられますか。それともまた御答の聲がしかと聞え上げられませぬか。御答の響が感ぜられませぬか。もしあなたが聞えぬと云はゞ、そは何故に聞えぬのでせう。

御親はあなたを眞實に愛して在ますことなれば、遣る瀬なき親心で汝はよくも思ひつきしぞ、汝が眞ごころから吾御親と云ふて呉れよかしと忘るゝ間はなきに、能くも我名を呼んで頼む心をおこせし

ことよと思召す如來に在ませば、何ぞあなたの稱名に御答なき筈はない。かやうな譯なれば必ず御答は有る筈なれども、あなたがよその爲めに御答を自分と聞きはづして居るのかと思ふ。實に甚深微妙なる御答の響は、そりやくな思を以ては聞え上げられぬ。

私には御名を呼び上る毎に微妙の靈感を以て答へ給ふことなれば、ましてあなたに對して御答ない筈はない。然れば如何に心を致して御名を呼び上ぐれば、御親の御答の響き聞え上げられるであらうとなれば、私は斯やうに心を至して念じ上げ、また御答の響が聞え上げられます。

眞實に如來様は私の眞正面に在すことを信じ、深く念ひ上げて、ナムアマミダ佛と餘念なく、己が心の統一するまで念佛して居りますと、漸々に心も靜りて餘念なく、只如來さまの御慈悲の面かげが自づと彷彿(ふふ)として思はれて來る時に、何とも云はれぬ辱けない有り難さの靈感が感じられて來ます。これぞ如來の御答であります。如來の御答は耳には聞えぬが、直覺的に心に聞えられるのであります。あなたも斯やうに念を用いて一心に心を至して念佛して眞正面の如來に向つて念じ上げ、何時までも心の統一するまで念佛し如來の靈響を聞き給へ。始めの程は仲々二時間も三時間もかゝつてもそれはあなたの一大事のことですから辛抱なされ。段々に時間が短くも統一が出來て、益純熟するに

随つて遂には念佛しさへすれば、忽ちに三昧に入つて如來の靈響に充たされる妙境に入ることが出來て來ます。之即ち感應道交と申します。此の感應道交が宗教の唯一の機關であります。若し感應の聞えぬは、古人が、祈りてもしるしなきこそしるしなれ、己が心に誠なければ。

誠——信 愛 欲

誠に消極と積極の兩面あり。只偽らざるばかりの消極的計りでは積極の價值はない。積極的の誠とは内容の充實した所にある。内容を充實せしめんには、至誠心に彌陀を信じ、彌陀を愛し、世つぎたらい、と欲望し、其の内容の充實する所に價值あり。譬へば稻の果が能く實りて成熟せし如くに内容が出來てこそ眞の誠で、果が充實し成熟せし種子は播いて能く萌生え生育する。我々が心靈も全く彌陀に成熟する時は淨土に生るゝ。種が熟せし如く生産作用の能力を具有したならば眞の價值ある誠である。誠は形式即ち容器である。即ち彌陀の靈德を受容する容れものである。その容れ物たる誠の心がなければ受けたる德も失つてしまふ。

如來を眞實に信ず。信は信受と申して如來の眞實を我心に受容する信である。彌陀の眞實を信受する時は凡夫の身は卑しくも、至心の内に宿れる彌陀の聖種は實に尊い。經に喩を以て、婢女に轉輪王の聖胤を宿す時は卑女の腹は卑賤なれども内にやどれる胎子は頓て輪王となるべき聖德を有つて居る。其の如く今凡夫は愚かなれども其信心に宿れる彌陀の聖種は後にはやがて不退の菩薩として無上覺位に入るべき性を具して居る。斯の如くに我に聖種を賜る彌陀聖王に對しては實に愛樂(あはれ)せざるを得ぬ。また我等が愛の對象たる彌陀は最も圓滿に完全なるすべてに超えた人格でなくてはならぬ。宇宙間に唯一無比でなくてはならぬ。若しもより以上の人格者實在すと聞く時は或は我等が心は動かざるを得ぬ。より以上の人格に心が遷らざるを保し得ぬ。

故に我等は、彌陀は威神光明最尊第一にして而も智慧と慈悲と及び一切の萬德圓滿して一切諸佛に超へたる大靈的人格として神尊として尊敬すると共に滿腔の愛を捧げて彌陀を愛し敬して居る。すべてに超えし愛を以て只彌陀に容(ゆる)られんとして居る。愛は生命である。然れば即ち彌陀は我靈の生命の源である。彌陀の靈格を愛慕して忘れんと欲するも忘るゝ能はざる愛樂(あはれ)である。毎日々々東の海の清き水を以て面を清め洗ひながら昇る朝日の白いのを見ても直ちに最愛する所の彌陀の慈顔を

思ひ出さざるを得ぬ。信ありて愛なきは甘味がない温みがない。我と彼との間に血が通はぬ。さればあなたの心の奥に彌陀愛樂の温みと聖き血とが我と彼との間に通うて居りなさるか。忘れんと欲すと雖も忘るゝ能はざる爲に、身をも命をも惜みやはすると云ふ様な愛がありや否や。彌陀を愛慕して之が彌陀の御心に叶ひなば、寧ろ死する方に苦がなくなつても足らぬでせう。されどそれ程に現れ居らぬまでも心の底には愛して居ると認めて居る。如何となれば今現にあなたの信念の生命は彌陀に依つて未來永劫をかけて生命として居る。あなたはとまれ如來の實在を信じてそれをあなたの永恒の生命として、永恒の我なる生命は彌陀に在る事と信じ愛して今現に生きて居るのでせう。

こゝに於て若しも彌陀尊と云ふものは實在せぬと云ふ確乎たる證據が發見したならば、あなたの永恒の生命と頼みたる心はいかになつてしまふのでせう。夫こそは落膽失神してしまふのでせう。あなたは其の場合に左程に落膽しませぬか。若し彌陀の實在を全く否定さるゝ事實が到達したならばあなたは精神的に死ぬでせう。彌陀の靈光明につながる生命にして前途永遠の光明として居る生命にぶつたり割斷せられてしまつたならば如何なるでせう。それでも此の肉の生命さへあればよいと平然としてすまして居られるでせうか。若しも其の場合平然として居らるゝならば、あなたは本より心の奥底

に彌陀と繋る愛の生命が生きて居らぬ故であります。

斯やうな工合にあなたの心の奥底に最大の生命として彌陀尊を愛して居るに相違ないが其の愛の内
肛して居つて愛の熱が發しきれぬのかも知れぬ、或は其の内肛して居る所に却つて病氣が重いのかも
知れぬ。徳本行者が『あみだ／＼と戀する人の胸にほとけの絶へ間ない』と詠まれたなかにも彌陀愛
慕の消息が洩れて居る。

宗教は自己人格の向上を宗とする宗教が高尙である。唯だ極樂の快樂を貪る動機の爲めの宗教は惡
いとは云はぬまでも人格向上の動機には遠い。彌陀と云ふ絶對的圓滿の人格を心の底から愛樂してそ
の圓滿なる光輝ある人格を常に離れず之に愛慕し信樂して心々念佛し、其愛樂する人格に同化して自
分も如來に似合うやうに成ることを宗教として信樂する所に宗教の價值がある。二祖上人が念佛三昧
は不離佛值遇佛と申して常に佛を離れず常に佛に值遇する所に吾人を指導して常に光明中に行爲せし
むる大なる力あり。されば如來を愛樂して常に念々佛を念じて離れざることを要とします。

安 心

宗教的意識の確乎と決定した常恒不動の心理状態を安心と云ふ。安心は宗教意識の生命なり。故に未だ安心決定せざるものは宗教の生活に入らざるものと云ふべし。安心の文字の解に安心とは安置心、安住心の二義あり。また古來の傳ふる處によれば安心とは所歸、所求(もとめ)、去行(きぎょう)を確かに思ひ定むるを云ふ。

所歸とは安置心即ち自己の宗教意識に唯一獨尊なる歸命信賴すべきものを定めて自己の宗教意識を安置する義なり。

所求(もとめ)とは自己の精神心情の安住する處を定め置くことなり。

去行(きぎょう)とはさりゆく、即ち人の生れつきの現在の心の安住する處は自己の迷とまた罪惡と苦惱とに依りて成立したるものなれば、この心理状態を去りて、いと清きいと安き靈國に更(か)り行くべき修行のことなり。

所 歸

所歸とは宇宙間に於て唯一獨尊なる一切に超絶せる處の神尊、一切萬物を統御するところの靈格、萬法の歸趣する處のこの唯一なる神尊に歸命するにあらざれば他の救靈の道あることなし。故に全身全幅を擧げて歸命信賴するものなり。

此唯一獨尊なる神格をアミダ如來と號し奉る。佛教に諸佛ぼさつの名號甚だ多しといへども、みなミダ一佛の分身にして、無量諸佛本源に歸する時は唯一體なり。彌陀と一切諸佛とはたとへば一月天に在りて影萬水に浮ぶが如く、百川萬江の浮べる月にありて異あるにあらず。

一切諸佛は彌陀一佛の應用の化現、彌陀の靈知と靈能とによりて一切衆生を救靈せんが爲めの分身なれば本ミダを離れたる諸佛にあらず。然れども本に歸すれば唯一の獨尊なれば全心を投じて歸命し全力を竭して仕えまつるべきはひとり彌陀如來のみ。

自己は無知無力たゞ罪惡のみと識る

吾人自己の心中に、歸命信賴すべき本尊をいまだ安置せざるむかしをしのぶ時は實に自ら恥し自から恐る、むかしの生れしまゝの我心情のあさましさよ。面にこそあらはれね、いかり憎、嫉、嬌、貪、などのすべての罪惡の要素として心裏に見えざるなし。すべての煩惱の種子内に伏在すればこそ機會にふれ縁に對して競ひ起り己を害し他をなやめ罪をつくること極りなし。さればこそ聖典には「煩惱の毒蛇睡りて汝の胸に在り黑虺の室に在つて眠るが如し」と。吾人の胸中に眠伏せるもろくの毒蛇は外界の刺激にふるれば忽ちに覺醒して罪惡を顯動す。かゝる罪惡の巨魁を主我とは名ずく。此の主我を主人公とし獨尊として我意、私慾若しは主觀に若しは客觀に於て惡として造らざるなし。此の罪惡の源なる主我を中心とし本尊として過しゆかばいつか迷ひの里を出て罪惡の源を斷つことを得べき。この主我を主人公として精神生活せるものを迷の凡夫とは云ふ。いまだ宗教の生命に入らざるものと名く。

さて吾人は曾て無明にさまよひ魔王の奴となりて空しく貧里に苦しめるも、教主世尊の聖きみをしへによりて唯一の尊なる父の大なる靈能と大なる慈愛とを聞きしより、いまはむかしの非をさとり悔あらためて慈父に歸することを得たり。能く阿彌陀如來の眞理を知るときは宇宙は全體如來の中にあり。

如來は宇宙の最勝者なり。如來は宇宙の統攝者なり。如來は宇宙の無上權威者なり。如來は宇宙萬有の一大原則の基礎なり。如來は一切を救済する大力者なり。

吾人は無知なり無力なり。從來自からの力にて活きるものとおもひ來りしはその實然らず。宇宙の全體なる如來に活かされしなり。我等は曾つて自から知ありとをもへり。その實は宇宙の全智なる如來より與られし外にわが智あることなし。ことに我等の智はわづかなる身によりてかすかにほたる火だにあらざりしなり。我らは如來を離れては此身も生命も精神もすべてなきものなり。

如來は我身と生命と精神とを我に賦與し給ふことは何の爲ぞや。我に永恒の生命と無上の靈智に入らしめんが爲めなり。いかにして永劫の生命と無限の光りに入ることをうべきぞ。これ己を空ふし我

をすてゝ、永恒のいのちなる無限の光なる如來に歸命信賴するなり。我全心を盡して如來の眞我の中に投歸没入するなり。

我從來の主我中心の生命をむなしふして如來の中に生れ更(はか)るなり。如來の中に生れ更りし時には從來の我にあらざるなり。

如來の中に歸命し依屬せる我は永恒の生命なり。無量壽なり。無量光なり。

如來は光明普ねく十方世界を照して衆生の念ずる心を攝取し給ふ。

如來は我等のいける本尊なり。いま此身が太陽の力によりていける如く衆生心靈は如來の靈能によりて靈活せらるるなり。如來は我等がいける本尊として常に離るゝことなきなり。我昔は未だ曾つて知らざりき如來の大慈悲は常に攝取し給ふことを。また如來の光明はとこしなへに衆生を照し給ふことを。

いまはあきらかに信知す。如來の光明は夜も晝もとこしなへに衆生を照し給ふことを。如來の恩寵はいつも衆生をいつくしみ給ふことを。衆生聖名を稱ふことは如來は聞き給へり。如來を敬禮する

ことも如來は見給ふ。衆生念じ奉ることを如來は知りたまへり。吾人むかし曾て阿彌陀經をよみ奉りて阿彌陀佛現にましまして說法し給ふといふことは我らが死してかの國に生れて後に妙法を聞くものなりとおもひき。いまはおもふ否然からざるなりと。今吾等に對して現に在して說法し給ふなり。眞佛甚深微妙の聲は肉耳を以て聞くべからず。但心靈の耳を以て初めて無聲の聲を聞く事をうべし。

如來は常恒に法を説きたまへり。我が信心かたむけるとき如來の眞音妙にひびけるを聞く。我悲しむとき如來は大慈悲を以て慰藉し給へり。我怒るとき如來は愛語をもて我をなだめ給ふ。吾らがすべての惱にも如來の慈顔をおもひ奉らば忽ちに歡喜を感じいかなる逆境のなかにも吾に平和と安穩とを與え給ふ。

吾本尊はいづれの處に於いても離るゝことなし。行住座臥にへだつことなし。吾心に如來は安置し給ふ。しかれども吾はまた世のくさぐさの爲に如來の照鑑し給ふことを忘るることなき能はず。かの聖き名を稱ふるとき如來は吾が心に映現し給ふ故に常にいける本尊をここに安置すべきなり。わがこの身心は如來の靈應を安置し奉るところの宮なり。

吾ら肉體をもてるほどは一重の障をへだてゝ如來を觀見したてまつるなり。心眼にはさわりなきも

いまだ佛眼をえざるときはまだ一分のさわりなきこと能はざるなり。若しこの穢身をさりて佛眼開けし時眞佛如來を如實に知見することをうるなり。

吾は曾て思ひたりき。こゝに於て命終りめいもくして後始めて涅槃界に安住することをうるものならんと。否なり、如來の眞境は心靈界なり。俗にいはゆる冥途と云ふ如きものにあらざるなり。

此處を去りて彼處に發見すべきものにあらず。吾人は生れつきの我の所感をすて、正しく如來の中に投歸没入するとき如來の大恩寵に融合せるとき、從來の主我の安住する心情を超へて、小我中心の生命を捨て如來の中に生れ更(かへ)りしときすでに我信心はこのまゝ如來の靈界に轉生したるなり。これを有余涅槃(あまのねはん)と云ふ。即ちこの有余依の肉身はかわらざれどもこゝろは淨土に栖みあそぶことなり。このかたちを有しながら理想の極樂に安住するなり。

このかたちを實物と認むればこそ生死の怖れあり。かたちと迷の我てふこゝろをはなれて如來の中なる眞我を我と信認するときは本來は無量壽ならずや。

肉眼に七重寶樹や八功德池見えざればとて是極樂にあらずと云ふことをやめよ。吾人自己のはから

ひをすてゝ、如來を信念し清淨莊嚴の觀に入るときは七寶の靈國は吾人理想の前に彷彿たり。吾は今は無量光明土に逍遙としてあそべり。

吾人は又百味の飲食この肉のために味ふことあたはざるが故に心靈は極樂に安住せるものならずとおもはざるなり。我ら我をすてゝ如來の恩寵を觀ずる時法喜禪悅の妙味げに極りなく味ふ事を得ればなり。吾人は口腹の味は飽くことあるも三昧禪味は微妙にしてあくことを知らざるを覺ゆるなり。歸命信賴して之に一任しこの指導のもとに奉仕することを得ばこれを所歸の本尊を宗教意識に安置し奉つるとは爲す。

所 求

所歸の本尊を安置してこれによりて心靈の生活をうるを安心の一面とせば、常住の不變の靈界を求めて心情の安住する處を所求の境とす。

何故に吾人は常住の安住處を求むべきやとならば、吾人の天然の生活なる身心と現に依止する世界

の規定とは決して永恒の安住をゆるさざるなり。現世界は畢竟の安心を吾に與へざるなり。吾肉眼の見る處の世界は轉變極りなきなり。いま吾々の身は老病死苦免れざるなり。これを思惟する時は吾は不安の情に堪えざるなり。吾らは如何にして生死を超絶して不生不滅の眞界に超生することをうべきぞ。我はこれを求めて止まざるなり。

こゝに於て教主世尊の勅に隨うて不死の門は開けたり涅槃の城はあらはれたり。

聖き御名により聖き旨によりて眞如の都にいたり念佛三昧によりて蓮華藏界に入ることをするなり。眞善美の靈界に安住することをうるなり。如來の眞境に常住することを得るなり。

吾人はすべての吾同胞にすゝめて止ざるなり。とかく從來の我によりてすむ處のこゝろのすまい處を轉じて如來の安樂土に安住せられんことをと。世の人々を見るにたとへ形骸には綺羅の美を纏うて金殿玉樓に榮花をほこるも心はつねに三惡道に流轉し、即ち一念瞋恚のほむらをもやせば即ち心はならくの境界を現はし其なかに墮するなり。貪欲こゝろを惱ますは何ぞそれ餓鬼にあらざらん。嫉憎愚痴高慢或は烈火胸をこがし蠻水こゝろを浸す日々三惡のなかに循環し念々六道のちまたにさまよふ。ア、憐むべし。いたむべし。何ぞかかるあさましき心情をすてゝ如來清淨の處に安心を求めざる。

現に今此心一念彌陀にあれば一念の淨土一刻如來にあれば一刻の極樂。

極樂遠からず今は此一念めぐらして如來のなかに安立する時即ちこれ無量光土なり。

昨日までの娑婆にすめる心機を一轉して淨土に超生する時は自己の心性一新し人格一變するが故に天地もまた一變し乾坤もこれ昨日のそれと異れり。萬物光輝を發し事々希香を生ず。ア、樂し、げに極樂のなかに安住する心情は。ア、歡ばし、極樂に逍遙して極りなき理想のほどは。世の人々よ。何ぞよしなきこゝろを捨てゝこの如來のみむねのなかにすみかえぬぞよ。

吾人はこの有餘(ひ)の依身(しん)のあらんかぎり心は如來の極樂蓮華藏界にすみあそびて、この依身(しん)を蟬の如くに脱する時は無餘涅槃(ねはん)と云ふて實在の極樂涅槃界に歸入するなり。

去　　行

全心全幅を擧げて歸命信順する處の唯一の本尊を宗教意識に安置すべきことゝ、及び最終の求むる處なる眞善美の極樂に心情を安住すべきことをばすでに明しぬ。吾人はいかに心を致しいかに修行せ

ば従前の心情の安ぜし處より轉じてこの身は存しながら心は極樂に安住することを得べきぞ。これを去行(きこぎ)とす。

去行につきては五種聖行(ごしゆせいぎやう)等。即ち一心に専ら聖經をよみ、一心に専ら如來を禮し、一心に専ら如來及び清淨國土を冥想觀念し、一心に専ら如來の聖名を稱へて聖旨の現はれをいのり靈國の格(たき)らんことをいのり、一心に専ら如來の聖德を讚美しまた供養する等、要する處は、専ら如來の恩寵と自己の信仰とによりて相互の關係を親密にし、如來の聖寵吾人の信念に靈應し、吾人の信心に如來の聖意交感し彼此交渉感應致一し我れ如來に入り如來我に入り、己が心を空うし如來の聖意によりて自己の心意にみたしめ、ついに吾が心を轉じて如來の聖寵によりてアナタの聖德に靈化するにあり。

しかればいかゞせば吾人の心は解脱靈化することを得べきぞとならば、善導大師の曰く、一心に専ら彌陀の名號を念じ行住座臥に時節の久近(ひさかた)を問はず念々に捨てざるものを之を正定(しやうてい)の業(ごう)と名づく彼佛の願に順ずるが故に。

要する處は、口に聖名を稱ふるは意に聖寵を憶念せんが爲めなり。意常に如來を憶念する時は念々如來を捨離せざるなり。

行往座臥に常に如來を憶念し寤寐に之を念ふて念々常に捨てざる時は早晚に心眼即開すること。
心眼開く時はすなはち佛を見る。佛を見るが故に我が心と如來の恩寵と交感し融合す。如來の聖靈
を感ずるが故に従來の主我脱却し如來の聖意に變化す。これより後は如來の無作妙の聖意と自己の
心靈と致一するが故に、たとへば泉の湧出する如く如來の泉源より自己の心靈に聖德流れ出づ。歡喜
極りなくこれよりは如來我心眼の前に現在する故に我この身はこれ如來の宮なりと知る。

心情は常に如來の光明界中に安住するが故に平和と歡喜と極りなし。常に如來に歸命する故に如來
は常に吾本尊とし照鑑し給ふ。如來を念ずるが故に吾如來の中に安住して平和の生活を得るなり。

これよりは、この肉體はかわらねど、こゝろは菩薩聖衆の數に入り、如來指導のもとに生活々動せ
ん。

佛身佛土

吾人が瞻仰する所の大字宙を通じて全體是れ吾人が仰ぐ所の大御親の身心に在ませり。宇宙全體が

如來の御身にしてまた如來の精神に在ます。吾人は宇宙全體を通じて絶對的な如來と信ぜざるを得ず、全體が身にしてまた如來心なり。全體が如來心なるが故に宇宙は如來の大智慧光明の至らざる所はなし。また如來大威神力の存在せざる所なし。吾人が見る所の天地萬物日月星辰一切萬有も悉く如來心身の現象ならざるはなし。如來の本態は一體にして而も一切なり。實に不可思議にして不可思議なるものは如來に在ませり。自然界の萬有も如來心を離れて有ることなし一切の動植物いかに微少なるも如來心を離れては存することなし。微少なるものは微にして亦不可思議なり。宇宙の大なるは大にして亦不可思議なり。宇宙は如來心靈態の故に實に深玄なり。

吾人が肉眼を以て視る處のものは或る一方面に過ぎず。若し心眼を開きて見る時は此處が即ち常寂光土(じやうじやくかうど)なり。宇宙を盡して蓮華藏世界を現す。これ重々無盡の妙色莊嚴界なり。また大日自性法界宮(だいじつじやうじやうほうがいきう)なり。大毘盧舍那(びるしやな)如來無量の法の身の菩薩の爲めに常恒に說法し給へり。此處が即ち西方極樂世界なり。彌陀如來常に法輪を轉じ給ふ處なり。大日と云ひ彌陀と云ひ唯一の大御親の異名に過ぎず。敎祖釋迦牟尼また大御親の應化身(おうしん)なり。娑婆に垂れたる迹は小なれども其の内證の本地は法身無量光なり。無始無終の本佛なり。實に不思議にして不可思議なる大御親の御靈態

なり。我等斯の大御親を知らずして六道に輪廻せり。

宇宙は全體娑婆世界にして而もまた常寂光明土なり。娑婆即ち衆生界も無邊なれば佛界もまた無際なり。生死界も無盡なるが故に涅槃界(ねはん)もまた無盡なり。宇宙は如來大心界なれば一塵の色相あることなし。また宇宙は如來大心の妙境界なれば十方三世に互りて重々無盡の佛身佛土の莊嚴ならざる處なし。愚童の吾等さへも慧眼を以て觀ずる時は十方を盡して一塵もなし。若しまた法眼を以て視れば十方に勝妙五塵の色相(しき)なる味觸の妙境莊嚴ならざるはなし。

吾人は金剛經が色相を以て佛を見るの非なるを呵責するの眞理なるを諦信すると共に、淨土經に説く處の勝妙五塵の淨土の莊嚴の眞實なることを確信す。是二經の所説相互に映して大御親の眞空妙有の妙を示し給へり。若し單に一方のみに偏依する如きは未だ大御親を全く信じ能はざるものなり。實に如來大心の眞實不可思議を悟らざるものは空と云はゞ空に墮し有と云はゞ有に偏す。これ如來眞空妙有(みよ)の眞理を會得(あは)すること能はざるものなり。

大御親の聖意の現れたる清淨佛土は法界に周徧すれども衆生自ら知らず。唯穢惡充滿の娑婆とのみ感ず。若し大御親の光明に靈化する時は如來自性の境界たる靈妙不思議の清淨界を感見することを得

ん。宇宙は實に甚深なり。

吾人の精神亦不思議なり。是大御親の分子なり。分子開發すれば全體と合一す。靈性開發する時は
大御親と共に清淨國土に安住することを得ん。靈界を實驗することを得ん。

如來は全體一大心靈として法界に周徧しまた妙色莊嚴の佛身佛土として法界に充滿す。若し此の説
を聞いて疑はざるものは如來の眞理を諒解したる者なり。此れ眞實なり。慧眼を開きて實驗せられ
よ、吾人は大御親と共に行往坐臥に離るゝこと能はず。

本有無作(ほんなぬ)の報身

三身の説に就いては宗々其見解を異にし佛教中未だ一定したる説なし。然るに佛教に實相論あり縁
起論あり。聖道主義（哲學）淨土主義（宗教）あり。其宗教意識の立脚地が各別の故に客體なる如來
三身説も同一ならず。若し聖道（哲學）と淨土（宗教）との立脚地を異にする處を陳れば、聖道門は
因果的關係を以て現在の衆生と當來の佛陀とを區別し關係する時間的關係。乙は空間の關係であ

る。暫く聖道門にて因果關係とは、衆生初發心菩提心を發して菩薩の願行を起し、若しは長時に若しは短時に初發心より一生補處に至る階位を菩薩の五位とす。既に因圓果滿を佛果とす。因地の自己の發心と自己の行爲が自己の佛果を成就するにあり。斯の因果的の規定に就いては宗派によつて同じからず。

淨土教は宗教にして（因縁）即ち主體と客體との關係にあり。如來の光明と衆生の信念との關係なり。光明また恩寵とも云ふべし。人の信念を攝護し同化し給ふの義。信念とは如來の恩寵を信受し靈に活きんとの義。譬へば太陽の光熱化の力によりて地上の生物が養成せらるゝ如く、また太陽の能力には生物を養成するの功用あり。如來の光明には威神と慈悲と智慧との三靈力ありて人の知力と感情と意志とを靈育し給ふ。衆生は信ずるが故に如來光明を獲得し念ずるが故に信心を増長す。

斯の如く衆生の信念を因とし如來の大明光を増上緣として衆生心を長養す。斯の如き因縁によつて成立する宗教に於ては必ずしも聖道門の如く因果的の規定を要せぬ。

宗教の客體たる如來は必ずしも酬因感果の佛陀救濟的の對象を要せぬ。若し如來が全く六度萬行の因に報ひて其の結果たる因果律より成立したる如來が吾人に對して因果の規定に依らずして救濟の果

を得らるべき理なし。云ひ換ゆれば彌陀が菩薩萬行の因を積みおきし故に吾らが果滿の佛と成り得らるゝと云ふことは古來より疑はるゝ他作自受の難を免れぬ。本來絕對者の法則は二回に行はれてゐる。一回は天則に依つて自然界に行はれてゐる萬法は一切の生物に對して因果的ならぬはない。心靈界の方面は統一的の目的の理性は有るけれども自然界の生物の如くの因果律が行はれ居るとは思はれぬ。抑も報身の光明界即ち涅槃常樂界なるものは因果律に器械的に建造したものにあらず。

絕對大靈界には重々無盡の靈德具備して其内容は眞善微妙にして有らゆる萬善萬美の極致である。其中心本尊の神尊は一切眞理の本源一大靈力の原動にして因果の法則より成立したものに非ず。其大主權者は一切法則の本源一切因果の基本には爲り得ると云へども、中心本尊が因果律によりて成立したるものとは考へられぬ。

絕對者が心靈界の方に攝取するは即ち是合目的である。絕對者が天則に依りて因果法則によりて器械的世界の方面に一切衆生を生成するは是吾人が現に生れ居る自然界である。此生物の生成には因果律によりて爲る。然れども宗教の目的とする處の精神的に絕對界に闖入せんには、絕對者の聖意とも名づくべき謂はゆる終局目的の理性に隨はざるべからず。吾人が永遠の生命と絕對靈に合致せんに

は相待因果法に依らずして絶待の終局目的に依屬せざるべからず。

絶待なる大權威者が衆生の因果律に依りて成佛したるものとは考へられぬ。また絶待界は因果法に依りて成立したる結果とも考へられぬ。絶待者の終局目的の勢力に隨順して初めて吾人は如來に攝取し同化せらるべし。吾人は一心念佛三昧に依りて絶待威靈者大慈愛者と合致することを得らる。此合致したる大靈界の如來は因果法から成就された靈格とは考へられぬ。矢張り本有無作の報身と信ぜざるをえぬ。

大經の法藏因位

彌陀無量光は一切諸佛の本佛にして絶待者であり、極樂とは實は無爲泥洹(いんぎん)即ち諸佛安住し給ふ大涅槃(だいねはん)界の異名に外ならぬ。古來達者は悉く説く彌陀は諸佛の本體諸佛は彌陀の分身と。極樂とは涅槃界、涅槃界即ち無量壽佛土と。是佛教中最進化したる説なり。

また藕益師の如きは彌陀は本覺諸佛は始覺、諸佛始めて絶待の本覺の無量光彌陀と面前に接す此時

を正覺とすと。

是の如きの絶待靈界自然常恒涅槃界の四徳の莊嚴は實には本覺の靈妙界が顯現なり。是の如きの靈境は本有無作(むさく)なれども衆生無明(みんみ)に翳せられて之を知見することできぬ。こゝに於て本覺の如來より、此土の衆生の爲に、終局目的の界に攝取せんが爲に法藏菩薩は此地土に來れり。

法藏菩薩が世自在王佛の二百一十億諸佛の妙土の靈妙善惡を觀見して、我が建立する處の淨土を奇妙第一ならしめんと云ふも、是れまた本より絶待の靈妙界は一切の世界に超勝したること無論なれども、凡夫の心は此娑婆の種々の待比的の習慣に執して居る衆生をして満足の意を與へんが爲の善巧方便のみ。さればとて法藏菩薩の説が全く方便假設の説と謂ふこと勿れ。所以に。眞の絶待威靈者は方便假設の神に非ず永恒に活ける實在者に在す。斯く大威靈者在まし無比莊嚴の淨土は存在すれども、若し方便法身たる聖者が世に出でまして世の法に順して衆生攝化の道を設くるにあらざれば、衆生は大威靈者のもとに歸還することが出來ぬ。法藏菩薩は大威靈者の一の化現である。

法藏菩薩と云ふは古代の神話であると云ふ人あらう。けれどもいかに思ふもそれは其の人に任す。

例へば天照の神全く國の祖先の子と云ふことは實は古代の神話であると云ふ如く、任汝。天照の神

が國の祖先の子と云ふは神話であらうとも、今現に六合に照り互つてゐる太陽を取消することはできぬ。法薩比丘が神話だからとて今現に吾人が仰ぎつゝある絶待の大威靈者を否定することはできぬ。

釋尊

阿彌陀とは絶対無限光壽、十方三世一切諸佛の本体なり。彌陀と釋迦とは本地と垂迹なり。譬へば一月天に在りて影萬水に映るごとく、彌陀を離れたる釋迦あることなく、釋迦によらざれば彌陀の實在を實現することなく、釋迦の觀念内容即ち彌陀なり。法華壽量品の佛壽命無數劫と慧光照無量とは釋迦の本（眞）即ち阿彌陀無量光壽なることを示したるに外ならず。

念佛（意、口、身）

眞理の終局に歸趨すれば佛界に入るなり。佛界に歸するは眞理なる故に自然なり。法然なり。故に

易往といふ。唯絶對無限光壽即ち彌陀の聖名を崇め聖意を仰ぎ歸し奉りて、意に至尊をのみ憶念し、口に聖名を稱へ、身に聖意の實現に行動すべし。一念彌陀なれば一念の佛。念々彌陀なれば念々の佛。佛を念ずる外に佛に成る道なし。三世諸佛は念彌陀三昧によりて正覺を成ずと南無。

本願力

本願力(ほんぐんりき)とは先づ本願の意は大御親が一切の子に對する願望である。世間にも親が子に對する望みは子をして親自己と同一の位置に到らしめんとす。而して自己の志を繼がしめ第二の自己たらしめんとするにあり。大御親も亦然り一切衆生をして成佛せしめて圓滿至善ならしむるにあり。

力とは如來の一大靈力が一切の子等を解脫靈化せしめ圓滿に養ふ力なり。此の力法界に周遍す。此の力太陽の光化熱の三線を以て地上の萬物に及ぼすが如く智慧と慈悲と靈化の三能を以て衆生界の心靈を開悟與樂靈化するの能あり。如來の一大能力を以て萬物に及ぼすに二面あり。一方には大靈より萬物を發現能生養育する力となる是れ天地萬物に及ぼす能力である。他面には天則秩序の下に一切生

物を進化せしめて人類の精神生活となる時は心靈を開發解脫して靈界なる涅槃に攝する靈力なり。

本願力とは自然界の生物を靈界に攝取する力を本願力といふ。

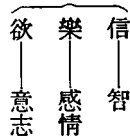
大靈は右の手を以て蔭く種を左の手を以て攝取するなり。天則秩序の中に因果の法則となりて萬物を能生能養するは其の目的は高等なる靈的生命として永遠に歸趣せしむるを目的とす。目的が即ち本願力なり。

其の本願を示す爲めに、往昔法藏比丘と顯れ、十劫正覺(がしやう)と現じ、また三世諸佛となりて世に出現す。歸する處は大靈の目的なる本願力の出現に外ならず。

三 心

如來本願力は常恒に十方に徧在す。然るに衆生如何にして此の靈的光明に攝取せらるべき。是れ衆生心が如來の本願力に契合して攝取同化する也。是ぞ大御親が法藏と示現して本願四十八の中、十方衆生至心信樂欲生の三心なり。

三心の内容



此の三心は如來の大靈力の目的の靈力と契合する心能なり。

至心は形式にして信樂欲は内容動機なり能く／＼研究すべし。

至心に深く信ず。(心靈的歸命信順)

如來の外に我心靈を攝取し給ふものなし。(いのちとたましいとをまかせ奉る)

如來は生命の御親。

心靈の御親。

救の御親なりと信じ奉る。

至心に深く愛す。(心靈的愛樂(あいぎ))

如來の外に心靈を愛護養育し給ふもの有ることなし。故にすべてのものに超えて如來の大なる聖寵を愛樂し奉る。

至心に深く欲望す（心靈的欲望）

聖きみ國は眞善美の至極の處、聖き處に於て御親の世つぎたらんことを欲望し奉る。

光 明

聖なる斯の光明我等が無明（冥）を攪きさまして眞理をさとらしむ。斯の光宇宙祕密の奥室を啓示す。斯の光生死の中に涅槃を與へ煩惱を轉じて菩提を成ず。凡夫をうつして聖者となす。斯の光われらのなやみの中に慰安を與へ。罪惡を變じて正善とす。斯の光心靈世界の太陽なり。斯の光を肉身に滿しめて釋迦牟尼と現はれ、キリストと現はる。月光は太陽の光によりて明し。若人斯の光によりて心靈を耀（や）かすときは即ち聖者なり。斯の光を知らざる故に生死闇黑の中にさまよう。

如來の光明とはいかなる相にてまた何なる働きをもつておるやを説明せば、光明に色光と心光との二種あり。色光とは日光また電光の如くに肉眼にて見るべきもの、心光とは心を照す即ち道理を明かにする光明である。光明と云ふは實は人の信仰に對する如來の方より與へ給へる靈力のことにて、宗

教にては如來と衆生との關係を親と子に例し、如來の親より衆生と云ふ子に對する作用を恩寵と云ひ、親の恩寵を眞に受ける人の心を信仰と云ふ。故に恩寵と信仰とは親から子に對する聖意と、子より親に對する心との双方の間に成立つ作用を云ふ。

華嚴經に譬を以て、譬へば天に日光あり人に眼目ありて能く物を見るが如く縱令如何に明眼あるも日光なくば見ることを得ず、またいかに日光明かに照らすとも眼目なき時は見ることを能はざる如く、如來の光明は永しへに照らし給ふとも人に信心の眼なくては知見することできぬ。されば往生論註にも、若し如來の光明は無礙に照らすものなれば何故に世間多くの人が見ることができぬぞとの問に、そは日光は照し居るも盲者は見ること能はざる如くに、信心の眼なきが故に如來の光明を知見することはできぬなりと答である。

今光明といふ事は私共の一心に念佛して信心を凝す時に御親の方より與へ給はる不可思議の靈力である。また恩寵とも稱へて、實に如來は光明を以て一切衆生を攝化し給ふこと太陽の光明を以て世界のすべての生物を活かす作用の如くに、如來の光明は人々の心靈を靈活せしめ給ふ能力である。其光明の存在に就ては實には理窟よりは實行によりて實感し得らるゝのである。故に何人も其光明の眞理

を聴きし上には一心に念佛して實地修行する時、信心萌發する時は實驗上自己の精神の實感として何とも云はれぬ氣分となる。

光化の人格これ證明

如來の光明は日光の如くに肉眼で見ることとはできぬ。其存在を云何にして證明できやうとなれば、今例を以て示さん、例へば太陽の光熱化に稻實を成熟すべき力能あるや否やは目には見へぬ。然れども稻實は全く太陽のエネルギーの能力に依て成熟することは疑ふべからず。此には田土に種子を播下し水を灌ぐなどして一方には太陽の熱や化合線の力を被むるが故に稻實は成熟する故に成熟せんとする時期の天候は非常に稻實の成績に影響を及ぼす。是を以て太陽の光に稻實を成熟せしむる力の有ることを證せらるべし。此に例して如來の光明が人の精神を靈化するの光明は肉眼では見ることも能はざるも、彌陀の光明威神の功德を聞きて其信根を培ひ一心に念佛する處に如來の不可思議の光明は其人の心靈に加はらん。人の本心は佛性の心田地あり如來光明の眞理を聞薰して之が其人の信心の種子と

成つて念々佛を念ずる時は、信心萌發して愈々信根を増長せしめて、信念益々増進する時は信心華開き花の如き感情及び情操の麗はしき人格は其内容に於ける信念の豊富なる處より現はる。

次に信念の益々堅實になり人格の核たる情操意志が全く靈化して、最も道德鞏固なる人格の神聖侵すべからざる如きに至るは是全く彌陀の光明に靈化せられたる最も信心の成熟したる結果である。例へば稻が始め暖溫なる和氣を受けて初めて萌發し次に苗として増長し花開きつるに實を結ぶ如くに、是彌陀の光明に靈化したる人格を以て彌陀の實在を證明することを得べし。聖善導、聖法然の如き最も圓滿なる靈的人格は全く彌陀の光明に靈化せられたる證なり。實は他の例證を引くに及ばず人々自から一心に念佛して彌陀の大光明に靈化せらるゝ時は自己の人格に結びたる核に於て證明せらるべし。

有餘、無餘、無住所涅槃

佛教の宗教的精神生活即ち信仰の行程として、人の精神生活に於て人が生れたるまゝの精神には自

然に佛性と煩惱（本心と氣質）との二性ありて具有す。此精神が一は開發すべきもので二は靈化すべきものである。人は如何に天資聰明なるも其資質いかに豊富なるも質のまゝにては宗教心は活動的ならず。人の精神には必らず解脫（とど)し靈化せねばならぬ垢質が具有しておる之を佛教には通じて煩惱と云ふ。此の煩惱なる惡質は自然に脫却すべきものにあらずして必ず之を脫却すべき契機を要す。此れ宗教の必要なる所以である。若し人が宗教なくとも自然に解脫し靈化すべきものならんか宗教要なきにいたる。若しまた宗教の教化を被むりても解脫し靈化すべき性能なきものなれば宗教なきに至る。

佛教、釋尊の宗教目的は那邊に在かと云はゞ、人は本來質のまゝでは本心の靈性も發揮せず煩惱の惡質も脫却せず此のまゝではいかぬ。釋尊は自ら太子の時代に宮中に在て人生問題に煩悶しまた自己の胸中には無明なる不靈福なる垢質具有するが爲に精神生活が靈明でなかつた。然して後に入山學道の後に無上正覺を證得なされた當時從來の無明罪惡の人間の心が滅殺して靈なる光明を獲正覺を成（なり)じて生死の凡夫が永世の靈と生れ更（か)りなされた。之に於て精神的に心機一轉して生れ更つた此精神狀態は實に無明の闇夜より正覺の旭出で新たに生れ人格が一變しなされた。從來は人間の肉に

生れたるもの生死の凡夫なりしが永生の聖者と更り、此に至て見れば肉體の上には異つたことなければども精神上に大革新した。之を有餘涅槃(おほねはん)と云ふ。有餘とは、餘依として此依身を指す。此依身は替らざれども精神が更(たが)まりて。精神更まり來つて觀れば宇宙全體がまた新たに白日青天、從來の婆婆の閨宅に在りし人が蓮華藏界光明裡の人となる。涅槃とは生死を超たる永恒常樂の境界にして極樂とも云ふ。即ち常住安樂自在清淨の靈界にして諸の聖者の心靈の安住する處、實には客觀界に認識すべき處にあらずして主觀界に實觀すべき直觀の靈界である。此靈界に種々無量の莊嚴何とも云べからざる至善至妙の境界が在る。

實を剋して論ずれば人の精神の最奥底を開きて圓滿に靈的に完成したる人の精神世界である。此光明主義の理想とする處の心的成就の極致である。

既に精神が宗教に依つて一轉し來れば此れ靈に生れ更(たが)りしなり。然れども此肉體の有らん限りは自然の生理あり制裁を免れず飢寒困苦なきにあらず。

彌々此依身の報命盡きて分解するに及んでは心靈は曾つて理想的に安住したる靈界が實現し來る、永恒常樂の寂光土が現はれ來る。諸の聖者諸佛の常住に住し給ふ理想の妙境界即ち常樂我淨の園に眞

善微妙の花咲匂ふ所、生死諸の苦惱脱して自然微妙の樂土の故に極樂といひ、また無量光明土とも智惠土とも常寂光とも種々の麗はしき名を以て表せらるる處、是光明主義の最終の目的と爲る處である。

無住處涅槃とは、生死に住せず、涅槃に住せず永恒常住に一方には涅槃界に安住して、また一面には生死界に分身應化して衆生濟度の事業未だ曾て暫くも懈廢せざるなり故に無住處涅槃と云ふ。

大光明中の生活

宇宙全體悉く如來大光明中ならざるはなく其の大光明中に在つて其の中に自ら二面ある。宇宙は一面よりは自然界、他面は心靈界前者を娑婆といひ後者を淨土と名づく。娑婆本より大光明中である。具存とは娑婆にも淨土にも如來の心身充滿せぬ處なし光明照らさぬ處なく如來を離れて娑婆の實體はない。然して衆生は本來如來の子である故佛性具つて居る。而して本願の光明に攝取せられ同化せらる時は身は娑婆に在つて神（念）は光明の生活である。然れ共身は自然に縛せられて娑婆に在るも理想

だけは光明中の人、淨土にすみあそぶ想あり。然して後命終る時は今まで理想に觀じて居つた光明界が今度は實現となるのである。

であるから形から見れば娑婆と淨土と異れども精神から見れば何れも同じ如來光明中である。大光明中に在り乍ら肉眼は娑婆を見て居る、宇宙同一の如來中に娑婆と淨土の實體にかはりはないのである。それは法界の眞實義なのである。

善導大師、元祖大師にもそれは確かに現れて居つたのである。けれども衆生が分からぬ故に方便して宇宙が全く二つあるやうに教へたのである。

此土入聖はわけが異(ちが)がう。一切處如來の光明中であるから現在から光明中の生活になるのが圓具教である。さればとて全く無比莊嚴の淨土無しと云ふのではない全くあれども十方に徧在して如來心と相應すれば經驗が出来るので、實驗できぬとも大光明中の生活とはなられる。

次に眞宗は信心歡喜乃至一念至心廻向即得往生住不退轉と云ふ。信心獲れば、身此のまゝ即得往生と。これやはり圓具教の一部である。死なねば往生できぬと云ふのは超然主義である。

また圓具教には精神には現在ながら光明生活で眞實莊嚴の淨土往生は身の死後である。

智慧と慈悲と威神力の光明

大悲の父が一切の子等をして、父の全き如くに圓滿なる佛に爲さんとの願望が本願とすれば、慈父はいかなる靈力を以て一切の子等を長養して其願望を果さんと爲し給ふや。世間の父たるもの其子の體育知育を爲すには資力がなくては應はぬ如く、慈父なる彌陀はいかなる資力を以て衆生を攝取し靈化し給ふや。曰く、

彌陀が衆生を攝取し靈化し給ふ靈力即ち本願力である、是を光明とも云ふ。名は異にして體は同一なり。即ち彌陀の大靈力である。例へば太陽のエネルギーが地上の一切の動物や植物を生成養育する力なる如く、彌陀の光明は遍ねく十方世界を照らし、衆生の心靈を靈養靈化なさる靈力である。

如來の智慧

例へば太陽が出づると世界が一體に明くなり、山河大地乃至一切の萬物が悉く能く見えて來る如く、如來智慧光が明け來れば、衆生の佛知見が開けて、淨法界の一切の靈的萬象が朗らかに觀ることが出来る。斯觀經に説き給ふ處の淨土の衆寶莊嚴の相とか亦佛の相好光明等を觀るといふは如來の智慧の中に衆生の知見が開けて見ゆるのである。如來の智慧光を被むれば佛の相好等を瞻(み)むばかり

ではなく佛の聖意をも見ることを得らると經に示されたり。即ち佛身を見る者は亦佛心を見上らむ佛心とは大慈悲なりと。此に心得べきことは、すべて如來の境界は肉眼にて感覺すべきものではない。直覺的に自己の心靈に觀すべき靈境である。經に如來是法界身、入一切衆生心想中と。例へば肉眼開く時は萬物悉く見ゆる如く、心眼開く時は佛の靈境界の相を皆な知見することが出来る。或は無生忍を悟り、又は總持門を得る。乃至一切の佛法を自ら明かに悟る等の働きは、如來の智慧光が人の知見に現はれしに外ならない。

如來の慈悲

太陽は明るいと云ふ外に又熱線がある、故に太陽が出ると地上が溫暖となる。それは熱線から發する處の能力である。總ての動物やまた植物の生存し得らるゝのは此熱からである。如來の慈悲に衆生の心靈が溫暖らるれば苦が抜けて自づと楽しくなり。而して靈的活動の原動力ともなる。人の心の溫暖になるのは慈悲である。世の中に他人の苦惱に對して怒りも同情もなき族を冷たい人と呼ぶ。彌陀は大靈的溫暖なる靈界の太陽なので、光明遍ねく天地に充ち／＼て在すから我等が其中に溶込んで了へば世の憂悲苦惱も自から消失せる。世には唯肉の幸福のみを追求め焦つて現在の満足を捉へんとす

る輩が多い。實は比々皆然りであらう。然るに此世界は彼等が希望を思ふまゝには容れて呉れぬ。夫が爲に彼らは終身煩惱の奴隸と爲つて、生涯を煩惱の墓に蒙むつて了ふのである。若し夫れ自己の奥底に潛める靈性が開顯して大慈光の生活に入る時は、求めざるに自から靈福を享受する事が得らる。實に眞の幸福は肉の我ではなく佛子と云ふべき靈き我となりて始めて得らるゝのである。然るに人は初めて煩惱の我ばかりなので靈き我は未だ卵子である。

其の大悲の懷に煖ためられて、孵化する時に始めて我は眞の佛子となる。また譬へば春日溫暖なる和氣が靄々として百花を綻ばす如くに靈なる煖氣遍ねく渡れり。斯の慈愛に觸る者は心靈の蕾が綻びて奇しき色と馨ばしき香を發するに至るのである。世に心靈の花ほど美なるものはない。されば佛は、人中の芬陀利華と稱譽し給ふた。

無緣の大慈は遍ねく法界に充滿てり。この慈愛に觸るゝ人は眞實勝妙の樂が感じられ其靈氣の中に融け入らば憂世の苦惱も覺えずなる。

我らが聖名を稱へて心神が彌陀の慈愛に抱擁せらるれば、法喜に充され、身も心も安らけく、禪悅の中には三昧の妙味極まりなきを覺ゆ。太陽の熱に依りて我らが肉は活ける如くに、我等の靈は彌陀

の大慈悲によりて永遠に活くるのである。

如來の威神力

如來の威神力または靈化の力と云ふのは、是太陽の化合線に例すべきものにて、人の意志を善化する作用である。太陽のエネルギーが化學作用を起して、地上の植物や動物を長養化育するやうに、彌陀の靈力が衆生の心靈を増長靈化するの増上縁となる。

衆生は本法身から受けた佛性を持つてをる。然れ共動物我なる罪惡の皮鼓に包まれて顛動することができぬ。一心に念佛して彌陀の大威神力加はる處に、內的の靈性は漸々に發育して光明に育まれ、やがて心の花開きて從來の煩惱我は轉じて、聖き人と爲り眞の佛子と生れ更り、人格が革新して光明の生活に入るのである。

又斯の光明は衆生の煩惱を靈化す。人には通じて貪瞋痴等の諸の煩惱と云ふ弱點を有つてをり又種々の形氣の質が有つて、其の爲に人格が圓滿に成ることができぬ。然るに此光に觸るれば煩惱も氣質も靈化せられて圓滿なる人となること、例へば蒺藜の果も、日光に乾燥せられて甘柿と爲るが如く、人の煩惱は若し轉化するときは還つて道心と爲り、惡き我は善き我と爲り、人の子が佛の子と靈化

す。是斯の光明の働きである。世界の總ての生物は、太陽のエネルギーを離れては生存することのできぬ如くに、彌陀の靈力なる光明を離れては成佛することができぬ。故に般若舟讚に三世諸佛は皆念佛三昧に由つて正覺を成ずと、此義である。

彌陀の光明唯念佛者を照す所以

如來の光明は遍ねく十方世界を照して、唯念佛衆生のみを攝めて捨てぬと云ふに就いては深き元因あり。其所以は先に演べし如く、彌陀の本願は慈悲の父が總ての子等を靈育して父の全き如くに全き佛と成らしめんとするにあり。要する所、唯靈き人格を作るにあり。眞の佛子と爲すにあり。然して念佛は父子合意の故に、生佛親縁の故に、佛願に順ずるが故に、乃至種々の因縁ありて、唯念佛者のみ光攝を被むるのである。大悲の父は唯吾子をして全く自己を繼續せしめんとするにあり。念佛者のみ眞の佛子とし全く如來を我父とし、念々に慈父の恩寵を憶念して止まぬ。

又母の哺乳に由つて子は養はるゝ如く念佛者は母子的の如き因縁を以て靈性養育せらる。親子的の親密なる因縁、餘の行人との比較にあらず。彌陀の光明は雷に明るきを與ふるのみでなく心靈を養育する靈力なれば、念佛者は全く彌陀の子なるが故に、彌陀の法乳に養はるゝことに適當せり。親子の

靈的内容に於て、實質が全然同じくなる故である。人の子を育てるに、牛羊等の乳よりかは母乳を哺するが適當せる如く、念佛の安心の衆生には、念佛三昧を以て彌陀の光攝にて靈育を被むるのが、能く相應してをる故に、唯念佛者のみを照し給ふ。

親縁、近縁、増上縁と三心

彌陀の光明遍ねく照せども、念佛の衆生のみを攝取するに三縁あることは、導師の釋し給ふ處、三縁とは近縁、親縁、増上縁とにて、此三縁と、また十八願の信、樂、欲、とに關係のあることを明して見んか。

(1) 深く信じて念佛すれば近縁(近縁)と爲る

彌陀の光明遍ねく照して洵らぬ限なし。衆生一心に念佛する時は信心の水澄淨す。信心水澄む時は佛の影映ず。感應同交して衆生信心の中に彌陀常に現在す。導師曰く衆生佛を見んと欲せば即ち目前に現じ給ふ故に近縁と名づくと。

實には如來智慧の光明は太陽の光の如くに遍なく照り洄らぬ限はない。衆生未だ信心の眼が開けぬ故に知ることができぬ。信心開發する時は謂ゆる天地一枚板、自己の直觀が即ち如來の心光である。如來の大智光明と自己の眞智と無二無別、是父子一體の智體である。眼眼を見ず、心心を知らず。如來の心智と衆生の信心とは日光と眼目との關係の如く、其近縁なること電子を容るゝの間隙もない。故に至心に信念する時は近縁を爲すといふ。

(2) 如來を愛して念佛する故に親縁となる

信仰が感情に入るを愛樂(あいど)といふ。彌陀を信じて最も親密になり、感情上相融合し相吸引して離れざるものは愛である。如來無上の慈を以て衆生を愛し給ふが故に、其の愛に育まれし我らまた彌陀を愛慕せざるを得ぬ。

温かなる血の糸を以て彼と我とを繋ぎ合ふて離るゝことのできぬものは愛である。彌陀と念佛衆生の間に於て此親密なる因縁が結ばれてをる。されば導師の衆生佛を憶念すれば佛もまた衆生を憶念したまふ、彼と此との相捨離せぬを親縁と名くと。我ら常に彌陀を念じて止まざる時は此血も肉もすべては彌陀の慈愛に融化されてくる。故に忘れんと欲するも忘る能はず離れんと欲するも離るゝことが

できぬ。それは深く彌陀を愛するからである。故に彌陀と念佛者とは永遠に切つても切れぬ愛の糸を以て永遠にまでつなぎ合ふてをる故に親縁と云ふ。

(3) 欲生の障碍を除く増上の力

意志の信仰として、彌陀の世嗣と成りたい、また佛國に生れたい、又佛に成り欲いまたは聖き人格と成り欲い、光明の生活に入りたいと云ふ欲望が發らざるを得ぬ。

すでに感情に於いて總べてに超えて、彌陀を愛す。然して愛の結果は彌陀と共に永遠にまで同棲せずば止まぬ欲望が生ず。されど凡夫と佛との中間に非常な障礙物が横はつて兩方の間を隔離させてをる。そは何なる魔物凡てまた何處に伏在するかと問はゞ答へて云はん、そは實は外に存在する物でなく、凡夫の胸中に伏して居る諸の煩惱と及び諸邪業繫である。然し夫らはいかに深重なる闇黒の力を以て我ら凡夫を悩ますにもせよ、彌陀威神の光明には敵するものでない。光明の生活に入り度いと欲望が深くして一心に念佛する時は、彌陀の光明が増上緣（さうげん）と爲つて、諸邪業繫の闇は必らず薄らぎて、ついには光明界の人と爲り得らる。我らは彌陀の強き力に助けられて、光明中に不斷に精進不斷の改革念々に佛道を増進し漸々に完全な人格に向上することをうる。

斯様に至心に深く如來を信じて念佛する時は、信心開發して、佛智光明中の我なることを信認するが故に近縁と爲る。又一心念佛して信水澄淨となるが故に佛日常に映現す、故に近縁と爲る。至心に如來を愛樂して念佛すれば彼と此と相離れず、最親密なる因縁と爲る故に親縁とす。至心に彌陀と共に在る人と爲らんと欲するも、諸の煩惱と邪業の爲に妨げられて佛と常に隔つ。然るに一心念佛する時は彼の佛の光明の増上縁に依て、障礙物が消滅して光明中の人と爲ることをう。

かやうな理由を以て十八願の至心、信樂（愛）、欲生の三心と光明攝取の親縁、近縁、増上縁の三縁との關聯を爲してをる。

信に聞思修の三位

信は知力の信仰是宗教生命の核となるべき聖種が形成する種子なり。信に三位、

聞——仰信

思——解信

修——證信

三經の依正莊嚴の如きは敎祖釋尊自らの經驗の境相を啓示し給ふもの、かゝる説を聞き、自分の經驗と同一に歸す。こゝに於て自ら證明して疑を容るなし。

有る人云はく、自ら信心すでに復活する時は塑像畫像も全く活ける聖靈體と信知せらる。是は眞佛に非ず塑像又畫像なるのみと認むる如きは未だ自己の靈が復活せざるが故に斯く感ずるのみ。

(靈活是榮が常套語)

四

修

(註—四修は(一)恭敬修(二)無餘修(三)無間修(四)長時修)

「至心」に三心あり。聖意に相應(かな)ふべき心の三徳。(一)至心に自己の罪惡を自覺し、専ら如來の恩寵を信認す。(二)感情に於てはすべてに超えて如來を愛慕し至心に憶念して止まず。(三)靈國(みくに)に生じ聖き世嗣とならんことを欲す。(註—歎德章の至心不斷)

「不斷」に四修あり。(一)如來に對して無上の尊敬を捧げて。(二)一行三昧に専ら如來を念じて、餘想を雜(まじ)えず。三聖意を體信し、相續して斷ぜず。(四)聖意を體得して、終身中止せず。

「稱説」(註―歎德章の稱説)に五聖行あり。一、救世の福音なる聖典をよみ如來の聖德及び淨土莊嚴等を識り以て信念を修養す。二、懺悔と感謝の誠心を表せる朝夕等の拜禮をもて信念を修養す。三、如來の相好淨土莊嚴の相及如來の智慧聖德を知見せんが爲に冥想觀念もて修養す。四、一心に聖名を稱へ聖旨の現はれを祈り、恩德感謝をして信念を修養す。五、聖歌をもて聖德を讃頌し、また香華珍膳等の供ものをもて而も修養す。

斯三要法の中、初の三心は如來の靈應を感じ心光を獲得すべき人の心意にて。四修は信念を鞏固にし完全ならしむる方法。五行は信念修養の材料なり。修養の宗とする處は自己の心意と如來の恩寵との投合にあり。即ち自己を如來の光明に投歸没入し肉我に死し靈我に復活するにあり。

要するところ若は口稱、若は憶念、一行三昧をもて一に如來に心意を注ぎ、心々相續して止ざる時は、若は頓速に若は漸次に如來の心光と感合し、恩寵喚起の機熟し、信心覺醒し心靈の曙(あけ)となりぬべし、之を恩寵の喚起と爲す。

執持名號

(註—如來様より綱、綱を握る衆生の圖に)

綱は本願にたとふ。

持は綱をとるにたとふ。

執は安心、(とるが如し)。

持は起行(たぐる如し)

上品(念々相續)。中品(時々相續)。下品(日々相續)

觀念と憶念との別

觀念は知力信仰にて理性を以て觀念推察して、佛の相好又智慧實相等を知見すること。憶念(愛念)

は如來を戀愛憶念すること。前は理性、後者は感情にて。哲學的に觀察するよりは、宗教的に戀愛憶想すること、憧憬して忘るゝ能はざる如きは、最も宗教の内容豊富なるなり。觀察は思索的に冷靜的に、戀念は暖溫熱誠にて自動的に衝動する感情である。宗教は感情を中心とす。

三種行儀

修行を爲すに尋常行儀、別時行儀、臨終行儀なる三種の儀式あり。

尋常行儀とは日々普通に爲す所の懺悔、讚歎、感謝、請求(乞ふ)の修行なり。

別時行儀とは特別の恩寵を得んが爲に殊更に時と處とを選んで行ふ所の儀式なり。

別時行儀に種々あるが歸敬、得度、布薩の三式あり。

歸敬式は誕生の時、婚禮の時、初發心の時に行ふ。

布薩とは教友と共に罪を誨ひ改め信仰を養はんがために爲す所の種々の修行なり。

布薩に懺悔、信仰の告白、傳道等の別あり。

懺悔は根本罪及び自造罪の許容を得んがため殊更に行ふ儀式にて。罪は糺明、痛悔、表白、贖罪の誓に依て免る。

臨終行儀とは死期に臨みて魔障を祛ひ如來の聖容を拜み正念に往生せんことを求むる爲に行ふ儀式なり。

難思光喚起の位

甚深維思の光明を、至心不斷に念ずれば、

信心喚起の時至り、心の曄（た）と成りぬべし。

如來光明を獲得して正しく信仰を得ると云ふことを聞いても、其光明とは太陽のように肉眼で見ゆるものでないから、まだ未経験のことであるから、自ら思慮することも出来ぬ。故に維思光と名ける。又實際に不思議である。

然れども眞實に信念する時は感應同交して其靈感を得、ついに佛に成ることができる。ちようど卵も孵化すれば鶏と成る性があるけれども之を暖めねばならぬ如くに、佛性も之を喚起發育せざれば佛と成ることはできぬ。

信心喚起の動機

全體信心を起すところの原因は種々である。教祖釋尊の如きは世の免れ難き老病死を見て世の無常を觀じて人生問題の煩悶となり、之が解決の要求から不老不死永劫常樂の涅槃を發見せんが爲に發心し、キリストは猶太教の教に人は祖代傳來の罪惡を有す。洗禮又聖靈に依つて清められざれば永遠の救ひにあずかることができぬから神の愛を求め。又大唐の聖善導は淨土の變相を見て悲喜交々にし、若し神（こゝろ）を淨土に移すにあらざればいかでか生死を出ることができようと益々宗教心が發動なされた。

或は人生問題の解決が動機となりて道を求めたり、或は家庭又は師友知識の誘引によりて志を發する等。

信心喚起の因縁

因とは人の心の先天の心である。人の心の大本は一切悉有佛性として皆佛と成り得らるゝ本性をもつ

て居る。それは衆生心地と云つて土地のようなものである。土地が荒蕪して惡草が蔓延して居るのは土地が惡いと云ふのではない。良き土地でも耕して良き種子を播下せねば良き植物の實は結ばせることはできぬ。人の心性ももと佛性と云ふ田地が荒蕪して煩惱の惡草が繁つて居る。之を開拓して、佛種縁より生ずと云ふ佛種子を播かねばならぬ。

佛性の田地も、喻へば硬地と沃地とあるが如く、それを宿因として居る。宿縁とは前生にてすでに信仰の基礎ができて居る者は沃地に種子を下す如くである。無宿善の人は硬地の如くである。たとい良田であつても好き種子を播き培養宜しきを得て豊富なる收穫があるが如く、師友善知識等の縁によらざれば信心成熟できぬ。

下 種 懺 悔

信仰を得て光明の生活に入らんには、先づ土地の開拓を要する如く、人の天然性は動物性の慾と惡意地と不正見の方ばかりが発生して、土地に惡草が蔓(はび)つて居るようなもので、貪慾、瞋恚等の諸

の煩惱、我見、我愛、我慢の我がまゝ等が佛性の心地を荒して居る。

業障(ごうし)と罪障と煩惱障との三障あつて心地を荒して居る。業障とは人々が先天的にもつて居る動物的本能の貪瞋等の煩惱と、その外に特殊的の氣負をもつて居る。或はりんしよくとか執念深いか勝負を好むとか突飛な事をしたり浮氣であるとか云ふ如き、それは先世の宿業から生れながらもつてきて居る。世間で云ふ遺傳的の性僻等である。罪障とは現世に於て自ら身と口と意とに造つた罪が障(さむ)となることで、煩惱障とは貪慾瞋恚愚痴を始としすべての弱點それより起る罪惡を云ふのである。之等懺悔せねばならぬ。

自己の罪惡を懺悔するのが信心喚起の動機と成る。然れども光に依つて始めて自己の罪惡を感じらるゝのである。

聖種 名號

人の心性は土地で、之に宗教上の種子を播くとは、種々の種子がある。五戒を全く持てば人道とな

るの種子。四聖諦の種子としては其の結果は阿羅漢と成る。菩提心を種子とすれば無上佛果を得る。喩へば梅の種から梅の木、杉の種子から杉の木と云ふ如くに。

今、阿彌陀佛の名號を種子として信念を修養せば其結果は阿彌陀如來と同體の覺(さとし)を得て、無量の光を以て普く一切の眞理を照見し、壽命無量にして永遠の生命と成るを結果とす。

名號の眞理を聞いて之が信仰の眞因と爲る故、名號とはいかなる眞理かそれをよく了解すべきである。名號とは名は體を徴すとて、阿彌陀如來は、經に其佛の光明無量にして十方の國土を照して障礙することなきが故に阿彌陀と名づく又其佛の壽命及び其人民の壽命無量の故に阿彌陀と名づく。アミダ佛は喩へば天體に於ける太陽の如くに心靈界の太陽である故に、其名を稱ふる時は即ち如來の光明不可思議なるを思ふ。阿彌陀の名に依つて體を徴するのが、即ち名號を呼んで萬德圓滿なる如來を念ずる。即ちこれ信仰の種子である。

要するところ阿彌陀の名と體とは同一なれば、名を稱れば意は佛を憶ふ。此心念が増長したる終局には彌陀同體の覺者と成ることができる。阿彌陀の名體不離の名を以て種子とすれば必ず結果は如來と同體と成る。

念佛を本として佛の心と我らが心と合致して尙進んでは佛心佛行を成すことが目的である。

如來は心靈界の太陽にして常に無量の相好光明普く十方を照し給ふ。斯の光に依つて我等が心と佛心と相應するのである。そこに信仰ができる。

信心喚起の法 五正行

唐の善導大師は五種正行(五正行)を以て心靈を養ひ信念を長養する資糧と定められたり。五正行とは、一、禮拜、二、讀誦、三、觀察、四、稱名、五、讚歎供養の五行である。

一、禮拜。自分はすでに彌陀の聖子である。此聖き心を養ふことは恰も食物を以て此身體を養ふのと同じことである。禮拜とは或は教會に於て衆と共に禮拜し、又は朝夕禮拜式によりて之を行ふことは朝夕の食を以て聖き心を養ふのが目的である。故に至誠信樂の心を以て行ふべきである。禮拜の時は親(おた)り如來の慈悲の溫容に接し、如來の大慈愛我心に充たしめ給ふことを念じ、要するところは如來の聖意と御力とが我心に充實するところにある。己がすべての汚れたる心をさへげて如來の清き

聖心に換えていたゞくところにある。

次に讀誦正行とは聖經を讀みて自己の心靈を開導するにあり。淨土經は釋尊が自己の心靈界の實驗を啓示したものなればしば／＼讀む時は自己の心が開かれて靈界に導かる。例へば彼の佛の光明無量にして十方の國を照し給ふに障礙する處なき故にアミダと名づく、又、極樂國土には常に天樂(天)を作(な)す。黃金を地とせり。晝夜六時に曼陀羅華(曼陀)を雨(ふ)らす等の言に此方の心もやはり如來の光明の中に安住するの想また極樂の園林に逍遙する想起る。または是の心佛と作り是の心是れ佛なり諸佛正徧智海は心想より生ず等の金言に誘はれて我心も佛心に相應せしめんと想ふようになる。經を讀むも又師友知識から如來の眞理を聞き得て信を取るも、要するところは自己の信念を開發し成就せしむるを目的とす。

三、觀察正行。冥想觀念を以て或は佛の相好光明を觀察し又は淨土の莊嚴の相を憶念し、行住坐臥に觀念する時は、始には想像に見え、または常に如來と共に在つて離れざることを想ひ、水を靜めて月浮ぶ如く明鏡をもて面像をうつし見る如くに、佛の慈悲のみすがたを映現せしむるを觀察正行といふ。

四、稱名正行。稱名に三の意がある。請求（乞ひ）と感謝と讃歎とである。請求と云ふのは如來の救ひを仰ぐこと又光明の攝取を求むること。感謝とは如來の本願力に救はれて御慈悲の懷（まごころ）に抱かれあふることを有りがたく感じて謝すること。稱名また念佛三昧と云ふも、衆生一心に佛を念ずれば佛心が我心に入り給ふ、我心は佛心の中にあり、衆生心と佛心と融合して三昧の妙境に入る。

五、讃歎供養正行。新らしき讃歌を以て如來の聖德を讃歎し、讃歎するに自己の心も如來の妙境におのづから逍遙するに至る時は情調に於て不思議の靈感を得らる。供養とは珍膳美味及び香華燈明等の供養である。最上なる供養は自心をすべてさゝげる心を以て仕え奉るにある。

上來の五種の正行は心靈を養ふ糧である。眞實の信を得んが爲には至誠心でなければならぬ。

初めの程は自己の心と法と能く調和ができぬ故にさまでに妙味を感じることが無い。そこが修行である。まずく進むに随つていよく深く信心増長して靈感極りなきを覺ゆるようになる。

此五正行は信心喚起の爲ばかりでなく、心靈を養ふ糧とすれば、終身捨つることはできぬ。自ら好んで止ることはできぬように成る。

五 根（信根進根念根定根慧根）

五根の初め信根とは如來の眞理を聞きて如來の恩寵を被むる時、自己は必ず解脱若くは救靈せらるゝことを信じて疑はず、如來は我親にて我は其子たりと信じて、此信が基礎となり信の根底が確乎として、又此信が發達せんが爲に次に精進根となる。

二、精進根、精進は即ち信仰を増進せんが爲の勤勉である。例へば米に糠あれどもつとめて捏く時は精白となる如く一心專精に大光明を念じて勇猛精進する時は心々相續し念々專注する時は益々發達す。

三、念根。いよく信念を専らにする時薰染分に功成じて常に如來を戀念慕慕して忘るゝこと能はざるに至るを念根と云ふ。

四、定根。一心に如來を念じて慈悲が其心念に薰染して久しければ、ついに自己の心が如來心となり如來の心が自己と成る如くに感じらる。

五、慧根。これ信念の根が益々發達して信心喚起の期至りてわづかに如來の靈光に觸れたることを自覺して其眞理を分に實驗し得て始めて靈の覺醒となり、朝夕の讚歎禮拜また知識の指導が靈を養ひ、至心不斷に念じ、信念内に増長し恩寵の和氣に催され、信仰の曙光を見、心靈の曄々となる。之喚起の滿位とす。

信心喚起し靈性萌發したので是よりは恩寵を被りて七覺心の花が開くを開發の位とす。